

小学校社会科における歴史教育と地域教材

—参勤交代を事例に—

*堀田 幸義・**堀田 理永

A History Education and Regional Teaching Materials in Elementary School Social Studies :
In the Case of Sankin-kotai.

HOTTA Yuki Yoshi and HOTTA Rie

要 旨

本稿は、小学校社会科の歴史教育における地域教材の活用について考察するものである。まず、大学生や現職教員を対象に実施したアンケートの調査結果をもとに、小中高でなされている授業の形態や地域教材に関する教員の意識を探り、元児童・生徒である大学生たちは教科書の内容に終始した授業を嫌っており、教科書以外の情報や知識を欲していること、現在の若手教員たちにとって地域教材を開発し活用する力は必ずしも必要と考えられていないことについて述べている。

次に、大和町立小野小学校において実施した参勤交代に関する地域教材を用いた授業実践の様子を紹介し、実践の結果を踏まえて地域教材の使い方について考察を加えており、「自分ごと」として「歴史」を学ぶ姿勢を身につけさせる上で地域教材の活用は有効であること、しかるに、その使い方次第では児童の「歴史」への興味・関心をかえって喪失させてしまう可能性があることについて詳述している。最後に、教材化するのに適した仙台市博物館所蔵の貴重な絵図資料について紹介している。

Key words : 小学校社会科、歴史教育、地域教材、教科書、授業実践例

はじめに

宮城県の小学校教諭佐々木潤氏によれば、小学生たちの最も好きな教科は体育科であり、片や最も嫌いな教科は社会科なのだといひ、氏が多くの子どもたちに聞いたところ、社会科は、「むずかしい」、「おぼえることが多い」、「どうやって調べるかわからない」などの意見がみられたという。また、講義式の授業だけでなく、自分たちで何かを調べるような学習についても「楽しくない」という感想を持っているようで、¹ 必ずしも、何かしらの活動をさせれば児童たちの興味を惹くことができるわけでもなさそうである。

これが本当だとするならば、児童たちの興味・関心を刺激し、彼ら・彼女らをして社会科の学習に主体的に取り組ませることは、他教科に比べ非常に難しいということになる。まして、社会科という教科をどうして学ぶ必要があるのか、そうした「社会科を学ぶ意義」を児童たちに捉えさせることは容易なことではないであろう。小学校にあっては来年度から新しい学習指導要領が全面実施される予定であり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている² 昨今、こうした社会科嫌いの児童たちの興味・関心を喚起し、学ぶことの楽しさを実感させ、学ぶ意味を捉えさせるには、一体、何をどう改善していけば良

* 社会科教育講座

** 大和町立小野小学校

いのであろうか。

先の佐々木氏の質問に「おぼえることが多い」と答えた児童にとっては、社会科＝暗記という図式が出来上がってしまっており、暗記の繰り返しが社会科に対する否定的な認識を生んでいるように思えてならない。この「暗記」という言葉は社会科のなかでも特に歴史学習について語る際にしばしば使われる表現であり、その裏返しとして、戦後「社会科」が新設されて以降、「歴史(社会科)の勉強は『暗記』ではない」という類いの警句が幾度となく発せられてきたのである。³ところが、こうした歴史の勉強＝暗記というイメージは今現在に至るまで払拭されることなく、児童・生徒たちの歴史学習に対する意欲を失わせる大きな原因の一つになっている。

和歌山県の小学校教諭中瀬雅之氏も「『歴史が苦手』という子どもは『暗記する』という印象があるようで、歴史学習＝暗記となってしまっている」といい、「歴史学習＝暗記と感じてしまう要因の一つに他人事であるということがある」としている。⁴そもそも、現代社会に生きる私たちにとっては、遠い過去に起こった歴史的事象というものを「自分ごと」として捉えにくい面があり、かつて遠山茂樹氏が指摘したように、児童たちは「自分の生活経験をはるかにこえた過去にたいして、傍観者であるのが、本来の姿」なのである。⁵たとえアジア・太平洋戦争という誰も忘れることなどできないような出来事さえ、それを経験していない世代にとってはあつという間に「他人ごと」化するのであり、⁶まして、何世代も前に起こった歴史的事象を「他人ごと」ではなく「自分ごと」として学ばせるのは容易なことではない。

中瀬氏は、「『歴史っておもしろい』と感じさせるためには、学習の仕方がわかり、自分と関係あることを学ぶということが重要なことである」とし、地域教材を使った授業実践を通じて「歴史」を「自分事」として捉えさせる試みを行っているようだが、⁷筆者も、前稿にて、地域教材の活用が児童・生徒をして自らに

引きつけながら歴史的事象を考える一つのきっかけを与えることについて詳述しており、1980年代初頭の仙台市で起こった「脱スパイク運動」の教材化とそれを使った実践例を紹介している。⁸

本稿は、前稿に引き続き、小学校社会科の歴史教育における地域教材の活用について考察するものである。まず、大学生や現職教員を対象に実施したアンケートの調査結果をもとに、小中高でなされている授業の形態や地域教材に関する教員の意識を探り、次に、大和町立小野小学校において実施した参勤交代に関する地域教材を用いた授業実践の様子を紹介し、その実践結果を踏まえて地域教材の使い方について考察を加え、最後に、仙台市博物館に所蔵されている貴重な絵図資料について紹介してみたい。

1. 元児童・生徒の記憶、教員の意識

(1) 問われる教科書の使い方

筆者は、本学にて開講されている授業「日本史概論」の初回冒頭において、毎年、「歴史の授業・勉強」および「歴史」に関するアンケート調査を実施しており、2009～2018年度までの10年間に同講義を履修しアンケートに答えた大学1年生合計520人分のデータを集計済みである。⁹まずは、この調査結果をもとに、小中高において実施されている授業の様子とそれに対する大学1年生の意識や評価について探してみたい。なお、このアンケート調査は、前述した通り、第1回目の講義冒頭で行っているものであり、筆者がまだ授業を行う前の状態であるので、大学における講義の影響は全くない状態での調査ということになる。したがって、受講生たち自身が小中高の学生生活や日常生活の中で抱いた「歴史の授業・勉強」や「歴史」に対する感じ方・考え方を読み取ることができるものである。

まず、「歴史の勉強」に「暗記」というイメージがあるのかどうかについて、図1のような質問項目を設けたところ、表1のような集計結果を得ることができた。

(3) あなたがこれまで行ってきた「歴史の勉強」を振り返り、「歴史の勉強」＝暗記というイメージがありますか？当てはまる項目に印(☑)を付けて下さい。

①ある☐ ②ない☐

図1 「歴史の勉強」についてのイメージを問う質問項目

表1 暗記イメージの有無

暗記というイメージ	選択者数	割合
「あ る」	363	69.8%
「な い」	157	30.2%
合 計	520	100.0%

*図1の質問(3)をもとに集計。有効回答者数は520人。

すなわち、約70%の者たちが「歴史の勉強」=暗記というイメージを持っており、換言すれば、約30%の者たちは「歴史の勉強」=暗記とは考えていないということもわかる。

では、この違いはどこから来るものなのか。歴史学習を「暗記」と捉えるかどうかの違いは、自らがどのような方法で歴史学習に臨んできたのかという個人的な勉強法の違いに起因する可能性もあるが、むしろ、高校生までに受けてきた授業の違いによって生じた可能性が高いのではないと思われる。実際に、今年度、ある授業で筆者が出したレポート課題に「私自身小学校・中学校・高校と教科書の内容中心の授業を受けてきたため、歴史は暗記科目という印象が強かった」という感想を記してきた学生が存在しており、歴史教育を担う教員たちがどのような授業を展開しているの

か、学習者の立場からいえば、教室で展開される授業がどのような方法・内容で行われるのかによって、ややもすれば、「歴史は暗記科目という印象」を植え付けられてしまうことがわかる。

この学生は「小学校・中学校・高校と教科書の内容中心の授業を受けてきた」と述べているが、「歴史の授業・勉強」に関するアンケートの調査結果を整理していると、かつて小中高で学んだ児童・生徒でもあった大学生たちが自身の受けてきた授業を振り返り、その善し悪しを評価する際に評価の分かれ目となるのが、実は、教員たちの教科書の使い方であることがわかる。

「日本史概論」において配付するアンケート用紙には図2のような質問項目を設けており、受講生たちが高校までに受けてきた「歴史の授業」の「良かった点」と「改善して欲しかった点」について探っている。¹⁰ すなわち、小学校・中学校・高校の日本史・高校の世界史の4つの選択肢のなかから、「特に良かったのは」どの授業であり、「特に改善して欲しかったのは」どの授業であるのかを選ばせ、「良かった点」・「改善して欲しかった点」について自由記述欄にそれぞれ記述させる方法を採用している。

(2) あなたがこれまで受けてきた「歴史の授業」の①良かった点、②改善して欲しかった点について当てはまる項目に印(☑)を付け、下線部に記入して下さい。

①特に良かったのは、 【小学校☐/中学校☐/高校の日本史☐・世界史☐】 の授業
⇒ 良かった点

②特に改善して欲しかったのは、 【小学校☐/中学校☐/高校の日本史☐・世界史☐】 の授業
⇒ 改善して欲しかった点

図2 「歴史の授業」の良かった点、改善点を問う質問項目

この自由記述欄に学生たちが書いた声を拾い集め、どのような授業が評価されているのかを探ってみると、

【「小学校」選択者の記述】

○「教科書、資料集に載っていない予備知識を教わった点」

【「中学校」選択者の記述】

○「教科書の内容だけでなく歴史背景を余談を交えて話していて面白かった点」

【「高校の日本史」選択者の記述】

○「教科書に沿いながらも、教科書に載っていない、載っている事柄の関連事項がプリントに書かれており、それが資料集にも繋がって使っている教材全てが一つに繋がっていた点。」

【「高校の世界史」選択者の記述】

○「先生が作ったプリントを基に授業を進めていて、そのプリントに教科書の内容だけでなく豆知識のようなコメントもついていて興味を持ちながら勉強できた点。」

といった具合に、「教科書に載っていない」、「教科書には書かれていない」、「教科書の内容だけでなく」などといった表現を枕詞にした記述を多くみつけることができる。つまり、児童・生徒たちは教科書以外の知識や情報を欲しているものであり、これは、そのまま「改善して欲しかった点」の裏返しとなっている。

すなわち、「改善して欲しかった点」についての自由記述をみると、

【以下、「小学校」選択者の記述】

○「教科書にあることしか言わない、扱わない、説明しない。小学校で扱う以外の人物や事柄は全く扱わなかった。」

○「ただ教科書に書いてあることをそのまま板書していたこと。用語ばかりで要因や背景があまり説明されなかったこと。」

【以下、「中学校」選択者の記述】

○「とにかく教科書だけで教科書を丸暗記させられて

いる感があった。区切りもなくひたすら文章だけを見つめて終わりというのは本当に大変であった。家でやるならまだしも、授業をしているのだから、もう少し頭に入ってきやすい工夫をして欲しかった。」

○「教科書の内容を丸写しという感じだったため、内容に興味を持たず、何を学んだのか結局分からなくなってしまった。」

【以下、「高校の日本史」選択者の記述】

○「プリント中心で面白みがあまりなかった。教科書に書かれていることを教えることにあまり意味を感じなかった。」

○「ただひたすら板書をして説明も教科書に載っているような説明であったため、授業が退屈で、独学でも勉強できるのではないかと感じたから。」

【以下、「高校の世界史」選択者の記述】

○「ただ教科書の内容をそのまま板書したり、話したりするだけだったので、それ以上の事が全く分からなかった。もっと資料集や教科書に載っていない情報を教え、より深く印象づけて物事を覚える授業であって欲しかった。」

○「教科書の内容をそのまま板書、プリントに書き込むだけだったので全く頭に入らなかった。」

のように、「教科書にあることしか」、「教科書だけ」、「教科書の内容を」、「教科書に書かれていることを」などという表現が頻出しており、校種の別を問わず、教科書の内容のみに終始する授業については軒並み批判されていることがわかる。

確かに、教科書に書いてあることをそのまま板書し、教科書の記述通りに説明するだけでは、何ら意味がないと思われても仕方ないであろう。黒川みどり氏がいうように「教科書のほとんどは、歴史学研究者が英知を結集して検討を重ねて執筆したもの」であるが、¹¹限られたスペースのなかに叙述するのであるから、ある事柄についての説明が不十分であったり、歴史的事象同士の因果関係や繋がりが不明瞭な書き方になっている箇所、あるいは、叙述の背景にある専門的な知識がなければ読み手の理解が追いつかないような文章も出てくるであろう。本来であれば、歴史教育を担う教

員の側が、こうした教科書記述の足りない部分を口頭で補足説明したり、補助教材を使いながら児童・生徒たちの理解を促す必要があるのであるが、それをせぬまま「ただ教科書の内容をそのまま板書したり、話したりするだけ」では「教科書を丸暗記させられている」感覚を持ったり「全く頭に入ら」ないという言葉が出て来てもおかしくはない。

仮に、定期テストや受験対策の一環として、教員が要点を上手くまとめた穴埋め式のプリントを自作し、それをもとに授業を行ったとしても、プリントの中身が教科書記述から要点を抜き出した程度のものであったとするならば、「プリントの穴埋めを教科書を見ながらしていたので『覚えている』という感覚よりも『写している』という感覚が強かった」（「中学校」選択者の記述）などという批判が出て来てしまうのである。

(2) 地域への眼差しの欠如

前節でみたように、児童・生徒たちは教科書以外の知識や情報を欲しており、それを提供してくれる教員の授業に対して高い評価を与えていることがわかる。ただし、教科書の内容に止まらない授業であったことを説明する自由記述のなかには、

【以下、「中学校」選択者の記述】

- 「先生が教科書をただ読み進めるのではなく、歴史の中の裏話なども織り交ぜて話してくれたので、歴史の授業が楽しかったし、歴史が好きになった。」
- 「教科書に沿って学習していたが、要所で教科書には掲載されていないエピソードを先生が話してくれたことで興味が湧いて自分から学ぶようになった点。」
- 「教科書には載っていない歴史についての話や豆知識を先生が途中途中で話していて、とても面白かったので、授業も一緒に印象に残った点」

【以下、「高校の日本史」選択者の記述】

- 「教科書の内容を単になぞるだけでなく、事項に関係する小ネタも多く授業時間中飽きずに集中して聞けた。話中心だったので流れて勉強できた。」
- 「教科書の内容だけでなく、ちょっとした豆知識や小話もふんだんに織り交ぜた授業だったので、理解

のしやすさ、覚えやすさがとても高かった。」

- 「教科書に記載されている流れのみならず、人間関係であったり、その歴史上の人物のおもしろエピソードなどをつけ加えて話してくれた点。」

【以下、「高校の世界史」選択者の記述】

- 「担当の先生が教科書の内容だけでなく、興味が湧く面白い話などをしてくれた。」
- 「教科書に載っていないような豆知識を色々教えて下さった点。」
- 「先にテーマの大まかな流れを明示してくれたので、理解がしやすく、詳細な内容も十分分かりました。また、時折、教科書に書かれていない小話を用意してくれていたおかげで、更に歴史への知的好奇心が刺激され、ますます歴史が楽しくなった。」
- 「教科書に載っていて試験で点を取るためだけの知識ではなく、その人物の面白いエピソードや時代背景も豊富に話して下さったこと。」

などのように、授業のなかで「裏話」・「エピソード」・「豆知識」・「小ネタ」・「小話」・「面白い話」などが披露されたことを以て評価している例をしばしば目にすることができる。したがって、学生たちがいう教科書以外の知識や情報が、必ずしも「深い学び」を実感させ「歴史を学ぶ意味」を捉えさせられるような良質なものであったとは限らず、学ぶべき学習内容の本旨から遠く離れた些末な「エピソード」や「小ネタ」が紛れ込んでいる可能性もあるのではないかと思われる。

もちろん、なかには、

【以下、「高校の日本史」選択者の記述】

- 「少し発展的な教科書に載っていない所までやったおかげで、すごく面白かったし、仙台市博物館や多賀城の博物館、多賀城跡につれて行っていただいたので、とても印象に残っています。」
- 「DVDを見せてもらったり、教科書の内容だけでなく、深い所まで教えてもらったところ。プリントが分かりやすかったところ。」

【以下、「高校の世界史」選択者の記述】

- 「教科書の内容に止まらず、関連するもので、少々高度なものまで教えてもらったお陰で、歴史に興味

を持って、印象深いものとなった点。』

- 「教科書に載っていることだけではなく、事実の裏にある要因とか、原因なども交えて先生が話してくださったので聞いていて楽しかった。生徒に質問しながら授業を進めていたので、考える時間が持てた。」

などという記載もみられ、高い評価を得た教員の授業というのは、教科書の内容をより深く理解するための補足説明や教科書に掲載されたある歴史的事象が起こった要因・原因、あるいは、歴史的事象同士の因果関係を理解させるための補足説明がなされていることもわかる。

表2 「特に良かった」授業の選択者数内訳

校 種	選択者数	割 合
高校の日本史	218	43.5%
高校の世界史	131	26.1%
中学校	113	22.6%
小学校	39	7.8%
合 計	501	100.0%

* 図2の質問(2)-①をもとに集計。有効回答者数は501人(調査対象者520人のうち、質問(2)-①における複数回答者13人、未回答者6人を除外)。

それでは、本稿が対象としているような地域教材を使った授業、あるいは、地域の歴史に目を向けるような授業を受け、それを「良かった点」の自由記述欄に記している学生はいるのであろうか。筆者が行ったこのアンケートにおいて、前掲図2にある質問(2)-①に回答した有効回答者数は501人であり(表2参照)、うち自由記述欄に未記入の者(=「高校の世界史」選択者)が1人いるので、「良かった点」について記述した学生数は500人(=自由記述の件数500件)となる。そのうち「高校の世界史」を選択した者が書いた自由記述の件数130件を除く370件のなかに「地域」・「地元」のような文言が入っているものを探してみると、「小学校」の授業に関する39件のうちから1件、「高校の日本史」の授業に関する218件のうちから6件、合計で、たったの7件しかみつけることができなかった。その7件とは以下のような記述である。

【以下、「小学校」選択者の記述】

- 「担任の先生が自作で課題プリントを作ってくれて、それを自分の力で解決していくことが楽しく勉強するのが楽しかった点。社会科見学で地域の歴史ある建物や風土などに触れる機会が多くあり、身近に歴史を感じる事ができた点。」

【以下、「高校の日本史」選択者の記述】

- 「一通り教科書の内容をなぞるだけという先生が多い中で、教科書に出ている出来事が地元の文化などにどのような影響を与え、関わっていたかを詳細に教えてくれた点が、授業に興味を持ちながら受ける事ができたという点が良かったと思う。」
- 「私の高校のある地域の歴史なども教えてくれた点。小テストを細かくやってくれた点。」
- 「教科書を読むだけでなく資料集で詳細まで確認しながら授業が進んでいたため、非常に分かりやすかった。また、地域にある歴史と関係のあるものを紹介してもらったので、日本史をより身近に感じる事が出来た。」
- 「教科書に載っているような歴史的事実に加えて、エピソードや地域の歴史についても話してもらえたので興味を持って勉強することができた点。修学旅行を通して実際に遺産を見て歩くことができた点。」
- 「歴史新聞という、写真などを多く取り入れたプリントと教科書を並行して授業をした。また、教科書に取り上げられている出来事の年代に地元(盛岡)ではどんなことが起きていたのかと、連動していた。」
- 「授業の内容が受験のためのものだけでなく、その出来事が起こったときの背景や人物関係、人物をそれぞれの思惑なども説明してくれて、とても印象に残る授業であった。また、地元の地域のことについての歴史も話してくれてとても興味を持てた。」

もっとも、この記述を書いた7人以外にも地域教材を使った授業を受けた経験がある者や地域の歴史と関連づけた説明をなされた者たちがいた可能性はあり、そうだとするならば、この7人以外については地域にスポットを当てた授業や地域と関連づけた説明を「良かった点」として記憶していないということになる。

筆者は、そうした可能性よりも、このアンケートに回答した学生たちは、そもそもが、地域教材を使った授業を受けたこともないし、日本全体の歴史を勉強するなかで地域の歴史と関連づけた説明をなされた経験も少ないのではないかと考えている。

アンケートを実施した2009～2018年度における本学入学生の出身校を『宮城教育大学概要』¹²にて確認し、10年間の平均値を割り出してみると、東北地方の高等学校出身者の割合は入学生全体の92.0%を占めており、そのうち、宮城県内の高等学校出身者の割合は53%を越えている。このデータを考慮すれば、アンケート回答者のほとんどが東北地方の高等学校を卒業し、なかでも宮城県内の学校を出た者の割合が高いのではないかと思われ、したがって、彼ら・彼女らが学んだ東北各県の小中高では、「地域」に着目した授業作りがあまり行われていないのではないかと想像してしまう。

筆者の経験からいって、宮城県内や仙台市内にある高等学校を卒業した本学の入学1年生が宮城県や仙台市の歴史についてほとんど何も知らないというのは珍しいことではなく、伊達政宗が仙台で生まれたと思っていた学生を何人もみている。これは、何も、宮城県の出身者ばかりが地元の歴史を知らないというわけではなく、ほかの東北各県の出身者であっても、状況は同じである。

こうした学生は、小中高で受けてきた授業を初めとして、自らが住む地域の歴史に目を向けるきっかけが少なかったものと推察され、歴史教育を行う側も地域の歴史を教材化しようという意識が強くないのではないかと思われる。その根拠となるような例を挙げれば、

次のようなデータを示すことができる。宮城教育大学は、文部科学省が実施した「地（知）の拠点整備事業」の公募に応募し採択され、2013～2017年度にかけて、宮城県教育委員会・仙台市教育委員会とともに「宮城協働モデルによる次世代型教育の開発・普及」というテーマの事業を行ってきた。その取り組みの一環として、宮城県および仙台市の教員のうち初任者研修・5年経験者研修・10年経験者研修の参加者を対象にした「教員の養成と研修に関するアンケート」を実施しており、¹³ アンケートのなかに「地域教材を開発し、活用する力」がどの程度身につけているかを問う質問項目が入っている。その項目に関する、宮城県および仙台市の小学校・中学校・高等学校・中等教育学校・特別支援学校の教員859人を対象とした2017年度分の調査結果を集計したのが、表3-①である。同様に、「地域教材を開発し、活用する力」について、教員自身の経験から考えて、新任者が学部卒業時点までにどの程度身につけておくべきであると思うかを問う質問項目があり、その結果を集計したのが表3-②である。

すなわち、表3-①からは、アンケートに回答した時点において回答者であるそれぞれの教員自身がどの程度「地域教材を開発・活用する力」を持っているか、その自己認識を探ることができ、表3-②からは、自らの経験に照らし合せて考えた場合、教員を目指す者たちが学部卒業時点までに「地域教材を開発・活用する力」を身につける必要性がどれくらいあると考えているかを探ることができる。

表3-①をみてみると、「地域教材を開発・活用する力」が「かなり身につけている」・「少し身につけている」と回答した教員は859人のうち155人（全体の

表3-① 「地域教材を開発・活用する力」の有無

	かなり身につけている	少し身につけている	どちらともいえない	あまり身につけていない	ほとんど身につけていない	合計
初任者研修	0 0.0%	38 11.8%	98 30.5%	115 35.8%	70 21.8%	321 100.0%
5年研修	1 0.3%	76 23.1%	108 32.8%	116 35.3%	28 8.5%	329 100.0%
10年研修	2 1.0%	38 18.2%	89 42.6%	61 29.2%	19 9.1%	209 100.0%
合計	3 0.3%	152 17.7%	295 34.3%	292 34.0%	117 13.6%	859 100.0%

*宮城教育大学COC事業イノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会が実施した「教員の養成と研修に関するアンケート 2017」の調査結果より作成。

表3-② 新任者における「地域教材を開発・活用する力」の必要性

	是非とも身につけておくべき	できれば身につけておくべき	どちらともいえない	身につけておく必要はあまりない	身につけておく必要はほとんどない	合計
初任者研修	61	132	95	29	4	321
	19.0%	41.1%	29.6%	9.0%	1.2%	100.0%
5年研修	33	117	124	50	5	329
	10.0%	35.6%	37.7%	15.2%	1.5%	100.0%
10年研修	12	70	86	34	7	209
	5.7%	33.5%	41.1%	16.3%	3.3%	100.0%
合計	3	152	295	292	117	859
	0.3%	17.7%	34.3%	34.0%	13.6%	100.0%

*宮城教育大学COC事業イノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会が実施した「教員の養成と研修に関するアンケート 2017」の調査結果より作成。

18.0%)のみであり、「あまり身につけていない」・「ほとんど身につけていない」と答えた教員は859人のうち409人(全体の47.6%)にも上っている。これを研修別にみると、「あまり身につけていない」・「ほとんど身につけていない」と答えた初任者研修参加者の人数は321人中185人(全体の57.6%)で、5年経験者研修参加者は329人中144人(全体の43.8%)、10年経験者研修参加者は209人中80人(全体の38.3%)となっており、教員としての経験を積むほどその割合は下がっていくことがわかる。

ただし、「かなり身につけている」・「少し身につけている」についてみると、初任者研修参加者は321人中38人(全体の11.8%)、5年経験者研修参加者は329人中77人(全体の23.4%)、10年経験者研修参加者は209人中40人(全体の19.2%)となっており、5年経験者研修参加者の方が10年経験者研修参加者よりも高い数値を示しており、教員としての経験の長さで「地域教材を開発・活用する力」を持っているかどうかの自己認識が比例しない結果となっている。これに対して、「どちらともいえない」の数値については、初任者研修参加者→5年経験者研修参加者→10年経験者研修参加者と右肩上がりに数値が高くなっている。

また、表3-②によれば、学部卒業時点までに「地域教材を開発・活用する力」を「是非とも身につけておくべき」・「できれば身につけておくべき」と考える初任者研修参加者は321人中193人(全体の60.1%)、5年経験者研修参加者は329人中150人(全体の45.6%)、10年経験者研修参加者は209人中82人(全体の39.2%)となっており、教職経験が長くなるにつれて割合が下がっていくことがわかる。逆に、「身につけておく必

要はあまりない」・「身につけておく必要はほとんどない」を選んだ割合は教職経験が長くなるほど高い数値を示すようになっていくことがわかる。

以上の結果から判断するに、現在の若手教員たちにとって、「地域教材を開発・活用する力」は、教職経験を積んでいくうちに、身につけているとも身につけていないともいえないようなレベルで持つようにはなるが、あっても良いし、なくても困らない、といった程度の認識しかなく、積極的に地域教材を開発し活用しようという意識はみられないのではないかと思う。

ただし、こうした状況を教員個人個人の意識の低下だけに結びつけて解釈するのは酷な話であろうし、間違いであろう。東京都立日比谷高校で世界史を担当している津野田興一氏は、2019年4月20日に歴史科学協議会事務所において開かれた座談会において、次のように語っている。¹⁴

また、教員になってからは、毎日、学び続けないといけないのですが、三〇年以上前とは違って、高校の教員になったからといって研修日があるわけではなく、夏休みや冬休みも全て出勤しなければならないわけです。部活指導もありますし、様々な雑務をこなさなければなりません。がんじがらめになっています。研究会に出かけるとか、史料調査に出かけるのは難しく、大学で学び直すのも難しい。こういうのが、高校の現場の実情です。

津野田氏は高等学校の教員であり専門性という観点からすれば小学校や中学校の教員よりも高いレベルが求められるであろうが、日々の業務に追われ、「研

究会に出かけるとか、史料調査に出かけるのは難しく、大学で学び直すのも難しい」状態に置かれているというのである。こうした状況は小学校や中学校でも当然のことながらみられるものと思われ、筑波大学附属小学校の教諭山下真一氏も「最近では多くの教師が教材づくりに十分な時間をかけるゆとりがなくなっている」とし、「だから、新しい教材を開発するノウハウがよく分からない若い教師が増えてきたのも事実である」と語っている。¹⁵

社会問題化している教員の多忙化であり、現実問題として、教材研究・教材開発にかかる時間がとれない教員が多く存在していることは想像に難くない。こうした状況をどのように乗り越えていけばよいのか、なかなか難しい問題であるが、時間的に新たな教材開発が難しいからといって、教科書に頼り切り、教科書の内容のみに終始する授業を展開したのでは、児童・生徒の興味・関心を喪失させ学習意欲も削いでしまう。前述したように、児童・生徒たちは教科書以外の知識や情報を欲しているのであり、教員自身が新たな知識や情報を蓄えるべく学び続ける姿勢を保っていく必要がある。

ここで、章を改め、参勤交代に関する地域教材を使った実践例を紹介してみたい。今回も前回同様に大和町立小野小学校の堀田理永教諭（以下、堀田氏と表記）にご協力いただいた。以下、第2章の内容は堀田氏の執筆による。

2. 授業実践例

(1) 指導案

第6学年1組社会科学習指導案

令和元年9月3日（火）

大和町立小野小学校

教諭 堀田 理永

1 単元名 日本の歴史

小単元名 江戸幕府と政治の安定

2 小単元の目標

○参勤交代や農民統制、鎖国などにかかわる徳川家光の働きや代表的な文化遺産を通して、身分制度が確

立して武士による政治が安定したことが分かるとともに、それらにかかわる人物の願いや働き、文化遺産の意味を考えようとする。

○江戸幕府の力の大きさや主な大名の配置の様子などから学習課題を見だし、文化財、地図や年表、その他の資料を活用して調べたことをまとめるとともに、身分制度が確立して武士による政治が安定したことや、それにかかわる徳川家光の願いや働き、代表的な文化遺産の意味について思考・判断したことを適切に表現する。

3 小単元について

(1) 教材観

2020年度より完全実施される新学習指導要領では、小学校における社会的な見方・考え方は「社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」と示されている（文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』2017.6。太字及び下線は堀田氏）。

本単元は、その新学習指導要領の次の目標及び内容に基づいて取り扱うものとする。

第2 各学年の目標及び内容【第6学年】

1 目標

- (2)社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- (3)社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の歴史や伝統を大切にして国を愛する心情、我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養う。

2 内容

- (2)ア（キ）江戸幕府の始まり、参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制を手掛かりに、武士による政治が安定したことを理解すること。
- イ（ア）世の中の様子、人物の働きや代表的な文化遺産などに着目して、我が国の歴史の展開を考えるとともに、歴史を学ぶ意味を考え、表現すること。

また、内容の取扱いについては、

第2 各学年の目標及び内容【第6学年】

3 内容の取扱い

(2)キ「現在の自分たちの生活と過去の出来事との関わりを考えたり、過去の出来事を基に現在及び将来の発展を考えたりするなど、歴史を学ぶ意味を考えるようにする。」

(一部抜粋)

に特に留意することとし、これが今回の研究の最も重要な視点となる。これに基づき、教科書で扱われている内容と関連付けて地域教材を工夫し活用することで、歴史的事象を自分事として捉えさせ、上記(2)キにつながる指導ができるのではないかと考えた。

地域教材を使う際のポイントとしては以下の3点がある(宮城教育大学、堀田2017)。

【視点1】何を学ばせるかによって、扱う「地域」の範囲を変える。

【視点2】教科書掲載の内容(国家史)と「地域の歴史」とのつながりを捉えさせる。

【視点3】「地域の歴史」と自分たちとのつながりを考えさせる。

以上の3点に留意し、これらを授業構成上の視点とした。

今回取り上げる地域教材「楽山公行列図巻」(仙台市博物館所蔵)(4/8時)と「仙台北城下の概略図」(『仙台市史 通史編3 近世1』92頁)(5/8時)は、現在、児童が暮らす宮城県域をかつて治めていた仙台北藩に関わる資料である。

社会科の授業において使用している東京書籍の小学校第6学年用教科書『新編新しい社会6上』には、加賀藩の参勤交代図が掲載されており、参勤交代にかかる日数を記した日本列島の地図には「仙台北藩」の名前が記されている(以上、『新編新しい社会6上』80頁)。例年、参勤交代図を目にした児童から「仙台北藩ではどのようなのだろう」という疑問が出されている。パネル資料「楽山公行列図巻」はそうした疑問に答えられると同時に、仙台北藩が数ある大名家のなかでも他に類を見ないほどの長大な行列を組んだことを視覚的に理解させることができるものである。行列の長さや人数の多さを実感させることによって、参勤交代が如何に多くの経費を費やすものであったのかを捉えさせられる格好の素材である。

『新編新しい社会6上』には、現青森県弘前市中心部の地図に旧弘前藩城下町にあった町の名前を重ねる形で、江戸時代の城下町のなごりが見られる様子を描いた地図が掲載されている(同書82頁)。一方、『仙台市史』に掲載されている「仙台北城下の概略図」は、児童が日常的に訪れたことのある仙台市中心部の江戸時代の頃の様子をうかがい知ることができる資料である。これは「仙台ではどのようなのだろう」という児童の疑問に答える際に適した資料である。また、この概略図では武士身分と町人身分それぞれの居住地がカラフルに色分けされているため、江戸時代の身分と居住地の区分について理解を深めるのにも良い素材といえる。さらに、小単元の第3～4時で取り扱う奥州街道は仙台北城下町を南北に貫く形で通っており、街道沿いには伝馬役を負担した町が見られることから、参勤交代制度を下支えしていた町の住民の側から歴史を考えるきっかけも与えてくれる資料といえる。

以上のように、教科書で学んだ参勤交代に関して宮城県に關係する地域教材を活用することで、教科書で学ぶ歴史的な事象がどのように現代の自分たちの生活に結び付いているのかに気付かせたい。また、歴史上の事象を日本の歴史としてだけではなく地域の歴史として現地の人々の視点で捉えさせるという点で、地域教材「楽山公行列図巻」・「仙台北城下の概略図」は適した題材であると考えた。

(2) 児童観(男21名 女14名 計35名/本時の実施日に3名が欠席)

地域教材を活用した授業が児童に与える影響を考察するため、小単元学習に入る前と本時の実施後にアンケートによる意識調査を実施した(後掲の「歴史の学習についてのアンケート①」・「歴史の学習についてのアンケート②」を参照)。なお、事後のアンケートを行った日に児童3名が欠席したため、以下の考察では、この3名分を除く32名分の調査結果について紹介したい。

ここでは事前アンケートの結果について述べることにする。設問「2. 歴史の学習は必要だと思いますか」に肯定的な回答をした児童は32名中30名ののり、歴史の学習の必要性を感じている児童が多いことが分かった。その理由として彼ら書いたものの中には、「昔と今はどのように違うか分かるから」「今と昔の違

わらず、過去の出来事は確かに「今」に関わりがあり、未来の自分たちにつながっていることに気付かせるようにしたい。そして、児童の中には既に「宮城県で活躍した人物について知りたい」「宮城県の歴史を知りたい」と地域に着目して学習意欲を高めている者も複数名いるので、本時の授業においてその意欲と着眼点を生かし、この実践の試みを主体的な学びが生まれる地域教材活用の中核とした。

(3) 指導観

本単元で活用する主な地域教材はパネル資料「楽山公行列図巻」と「仙台北下の概略図」であるが、インターネット上の Web サイトを活用し旧奥州街道沿いにあった宿場町の位置を確認する作業も行った。

児童は、まず、本小単元第1時・第2時において、江戸幕府が武家諸法度等によって大名を支配していたこと、3代将軍徳川家光が参勤交代を制度化したことなどについて学習する。

第3時では、コンピュータ室において「旧街道、駅伝、マラソン、サイクリングコースの地図サイト」である Web サイト「GPSCycling」の「旧街道地図」(URL: <https://gpscycling.net/tokaido/>) を活用しながら江戸から東北地方に至るまでの宿場町の名前をたどっていき(閲覧日: 2019年8月28日)、奥州街道は東北地方にあった街道であり現在のほぼ国道4号線にあたることや、街道沿いの数ある宿場町の中には自分たちの住む大和町に今でも残る「吉岡宿」、隣町である富谷市の「富谷宿」(新町宿)などがあったことを学習する。このように、奥州街道や県内にあった宿場町を取り上げることで、自分たちの住む宮城県、大和町に目を向けさせ、歴史と自分との距離を縮めさせることを目指す。

第4時(本時)では、仙台市博物館所蔵のパネル資料「楽山公行列図巻」を借用して学習活動を行う。この資料は全11巻から成り、仙台藩13代藩主伊達慶邦(楽山公)が1842(天保13)年に初めて江戸から仙台に国入りしたときの様子を描いたものである。このパネル資料は全てを並べると40m以上にもなるため、授業の前半は体育館で行う。並べられたパネルを目にするだけでも、児童はその大名行列の長さに驚くものと予想される。この行列は総勢どのくらいの人数がいるのか(総勢1577名)、どのような格好の人物がいるのか、ど

んなものが運搬されているのかなど、図から分かることを読み取ってメモしていく。授業後半は教室に戻り、気付いたことや分かったことを全体で共有する。共有の場面では、奥州街道や宿場町と関連させた気付きを取り上げ、前時の学習内容と結び付ける。また、資料の中に見られる様々な物品は、大名の家臣だけではなく各宿場町の人員や伝馬によって運搬されていることにも触れ、宿場町が単に休息所や宿泊施設としてだけではなく、伝馬役を負担する者たちの集住地としての役割を担っていたことに気付かせる。

第5時では、「仙台北下の概略図」を活用し、城下町には「材木町」「鍛冶町」「染師町」など当時の職業名が町の名前として残っていることに気付かせる。また、「新伝馬町」という町名に着目させ、本時の学習内容と関連付ける。ここでは、城下町建設当初には国分町と北目町が伝馬役を担う町として設けられ、伝馬役の需要の増大に伴って北材木町、新伝馬町も伝馬役を担う町として加えられたことに触れる。このことから、参勤交代は単に幕府が制度化したり街道を整備したりすれば行えるものではなく、そこには伝馬役を負担した宿場町の人々の存在があったことに気付かせたい。このように、参勤交代の制度化や街道の整備といったいわゆる中央からの視点だけではなく、伝馬役を負担した宿場町など日本各地の現地の人々の視点から歴史的事象を捉え、考えることのできる力を育みたい。

以上のように、教科書で学んだ参勤交代に関して宮城県に関係する地域教材を活用することで、歴史的事象と現代の自分たちの生活を結び付けて考えられるようになるとともに、歴史上の事象を日本の歴史としてだけではなく地域の歴史として現地の人々の視点で捉えることができるようになり、更なる学習意欲の喚起と主体的な学びにつながるのではないかと考えた。

さらに、次の単元「町人の文化と新しい学問」では、街道が整備されたことによって物資の流通が盛んになり、貨幣経済が全国規模の発展を遂げたことや、江戸を中心とした文化が急速に全国各地に伝播していったことなど、本単元の学習内容と関連付けた学習が進められるようにする。

以上のような指導を通して歴史学習の意味について考えさせ、歴史学は過去について学ぶにとどまらず歴史の流れの延長上にある自分たちや現代社会、さらには未来を考える学問であると気付かせる。

4 単元指導計画（本時 4 / 8）

時	<ul style="list-style-type: none"> 丸数字付：教科書（東京書籍）の内容 丸数字無：地域教材 	主な学習活動 （太字下線：地域教材の活用）	評価規準【観点】
1	①江戸幕府と大名	<ul style="list-style-type: none"> 日光東照宮の陽明門や徳川家光のエピソード「生まれながらの将軍」について分かったことや疑問に思うことを話し合い、学習課題をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 家光を中心とする幕府の力の大きさに関心を持ち、どのようにして力を強めたのか意欲的に調べようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 家光が幕府の力を強め確かなものにするためにどのような政治をしたか、学習問題を考え、予想している。 【思考力・判断力・表現力等】
2	②大名の取りしまり	<ul style="list-style-type: none"> 幕府領と大名領についての資料から情報を読み取る。 大名は親藩大名、譜代大名、外様大名と呼ばれるものがあったことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 親藩、譜代、外様の各大名と江戸幕府との距離や、その背景を資料から読み取っている。 【知識及び技能】
3	奥州街道と宿場町	<ul style="list-style-type: none"> <u>奥州街道や宮城県の宿場町についてインターネットで調べる。</u> <u>自分たちの住む大和町や隣町である富谷市などにも宿場町があったことを知る。</u> 調べた情報を基に、五街道と宿場町との関連について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 奥州街道や宮城県の宿場町について調べて分かったことをノートにまとめている。 【知技】 日本橋を起点として五街道が整備されていったことや、街道に沿って宿場町が栄えていったことを理解している。 【知技】 調べたことから次の学習課題を設定している。 【主学】
4 (本時)	大名の取りしまり(2)	<ul style="list-style-type: none"> <u>パネル資料「楽山公行列図巻」から、仙台藩の大名行列について読み取る。</u> 参勤交代について資料から読み取ったことを基に、家光を中心とする幕府が、どのようにして力を強め確かなものにしていったのかを話し合う。 <u>身近な地域の歴史から、歴史的事象が自分たちの生活につながっていることを理解する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 資料から読み取ったことや自分の考えを記し、意見交流を通して考えを広げたり深めたりしている。 【思判表】 参勤交代が行われていたこの時代に、五街道や奥州街道が整備され、それに伴って宿場町が設けられていったことを理解する。 【知技】 江戸時代に整備された奥州街道と現代の自分たちの生活とのつながりを理解し、歴史学習の意味を理解する。 【主学】
5	③人々のくらしと身分	<ul style="list-style-type: none"> 家光を中心とする江戸幕府が、どのように百姓や町人などを支配したのか調べる。 <u>仙台北城下の概略図から、気付いたことを話し合う。</u> <u>伝馬役を担った町に着目し、中央政権の立場からのみではなく、民衆の立場から参勤交代等について考える。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 武士、百姓や町人などの身分の特徴や、武士によって百姓や町人が支配されたことについて調べたことを、ノートにまとめている。 【思判表】 参勤交代は幕府による制度化や街道の整備だけで成り立つものではなく、それを支える宿場町の存在があったことや、伝馬役を担った宿場町の負担が大きかったことなどを理解している。 【思判表】

6	④キリスト教の禁止と鎖国	<ul style="list-style-type: none"> 家光を中心とする江戸幕府が、どのようにキリスト教を禁止していったのか調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 鎖国が完成するまでの歩みについて、資料や教科書から調べたことをノートにまとめている。 <p style="text-align: right;">【思判表】</p>
7	⑤大国とわたりあった琉球王国	<ul style="list-style-type: none"> 一つの王国として中国や日本と渡り合った琉球の歴史や貿易について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 鎖国中の日本や中国と貿易を続け、独自の文化を発展させた琉球王国の様子に関心を持っている。 <p style="text-align: right;">【主学】</p>
8	絵巻で見る、江戸時代の人々	<ul style="list-style-type: none"> 「熙代勝覧」を見ながら、江戸のまちの人々の様子について調べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸のまちの人々の様子に興味・関心を持っている。 <p style="text-align: right;">【主学】</p>

5 本小単元 4 / 8 時の学習指導

(1) 目標

- 仙台藩の大名行列について、パネル資料から情報を読み取る。 【知識及び技能】
- 資料から読み取ったことや自分の考えをワークシ

トに記し、友達との意見交流を通して考えを広げたり深めたりする。 【思考力・判断力・表現力等】

- 江戸時代に整備された奥州街道と現代の自分たちの生活と結び付けて考え、更なる学習課題を設定することができる。 【主体的に学習に取り組む態度】

(2) 学習過程

	学習活動 ○ 予想される児童の反応	指導上の留意点 【視点】
導 入 (5分)	<p>1 前時の学習内容を思い出す。 ○ 江戸時代に五街道が整備された。 ○ 東北地方にも奥州街道ができた。 ○ 街道に沿って宿場町も作られていった。</p> <p>2 本時の学習課題を確かめる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">江戸時代に奥州街道が整備されていったのはなぜかを考えよう。</div>	<ul style="list-style-type: none"> 奥州街道の宿場町には、「吉岡宿」「富谷宿」(新町宿)など自分たちに身近な地域のものがあったことを想起させる。 【視点3】
展 開 (30分)	<p>3 パネル資料「楽山公行列図巻」から読み取れること・気付いたことをワークシートに書く。(個)</p> <p>4 読み取ったこと・気付いたことを共有する。(全体) ○ 1000人以上の行列で、ものすごく長い。 ○ 籠に乗っている人物がいる。 ○ 莫大なお金がかかりそう。 ○ <u>分担しながらいろいろな物を運んでいる。</u> ○ <u>こんなに多くの人が泊まれる場所があったのだろうか。</u> ○ <u>奥州街道を通過して仙台まで来たはずだ。</u> ○ <u>街道沿いの宿場町に泊まったのではないか。</u></p> <p>5 参勤交代と奥州街道・宿場町の関係について考える。 ○ 仙台藩の大名は、奥州街道を通過して江戸と仙台を行き来していた。 ○ <u>奥州街道は、参勤交代をするために整備されていったのではないか。</u> ○ 江戸から仙台まで10日もかかるのだから、途中の宿場町に泊まっていた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 仙台藩13代藩主伊達慶邦(楽山公)の大名行列を描いた資料により、学習内容をより身近なものとして捉えさせる。 【視点2】 情報を読み取る視点を示したワークシートを配付する。 物を運んでいるものの中には、大名の家臣だけでなく宿場町の人馬(伝馬役負担者)もいたこと、それでも人手が不足した場合は近隣の町からも日雇い人員を確保していたことを補足説明する。 奥州街道や宿場町との関連で考えている意見を取り上げる。 本時のめあてに立ち戻って考えさせる。

<p>展開 (30分)</p>	<p>○これだけたくさんの人が泊まったから、宿場町がどんどん作られたのではないか。 ○奥州街道が整備されたから、今の私たちは国道4号線でいろいろなところに行けるようになった。</p> <p>6 学習のまとめをする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> • 参勤交代のために、五街道や奥州街道などの街道が整備され、宿場町が作られていった。 • 江戸時代に整備された道が、今の私たちの生活に欠かせないものとなっている。 </div>	<p>• 奥州街道は現在のほぼ国道4号線にあたることから、江戸時代に整備された街道が現代の自分たちの生活につながっていることに気付かせる。 【視点3】</p>
<p>終末 (10分)</p>	<p>7 歴史学習の意味を確認する。 • <u>過去の出来事の続きとして現在を考える。</u> • <u>歴史の流れの中に自分たちがいる。</u></p> <p>8 学習の振り返りをする。 • ノートに学習感想を書く。</p>	<p>• <u>歴史学習の意味をしっかりと捉えさせる。</u> 【視点3】</p> <p>• <u>学習内容を自分事として考えられたかどうかの観点で書かせる。</u> 【視点3】</p>

(3) 板書計画

江戸時代に奥州街道が整備されていったのはなぜか

<気付いたこと・考えたこと>

- とても長い行列
- お金がかかりそう
- どこに泊まった？

- 奥州街道を通過していた
- 宿場町に泊まった
- 参勤交代のために奥州街道が作られたのでは

㊦

- 参勤交代のために、五街道や奥州街道など街道の整備が進み、宿場町が作られていった。
- 江戸時代に整備された道が、今の私たちの生活に欠かせないものとなっている。

(資料から分かること・気付いたこと板書させる。)

(4) 評価

- 仙台藩の大名行列について、パネル資料から情報を読み取っている。 【知識及び技能】
- 資料から読み取ったことや自分の考えをワークシートに記し、友達との意見交流を通して考えを広げたり深めたりしている。【思考力・判断力・表現力等】
- 江戸時代に整備された奥州街道と現代の自分たちの生活と結び付けて考え、更なる学習課題を設定している。 【主体的に学習に取り組む態度】

【使用教材】

「仙台北下の概略図」(『仙台市史 通史編3 近世1』(仙台市、2001年)92頁)
「楽山公行列図巻」(仙台市博物館所蔵)

【参考文献】

「小学校学習指導要領解説 社会編」(文部科学省、2017年)
渡辺信夫『みちのく街道史』(河出書房新社、1990年)
渡辺信夫「第六章 交通体系の成立」(『仙台市史 通史編3 近世1』仙台市、2001年)
笠谷和比古「参勤交代の文化史的意義」(芳賀徹編『文明としての徳川日本』中央公論社、1993年)
菅野正道「忘れられた宿場町」(同『せんだい歴史の窓』河北新報出版センター、2011年)

堀田幸義「歴史の授業と地域教材」(イノベティブ・ティーチャー養成・育成マップ検討委員会「地域教材の活用を学ぶ講座(歴史編)」スライド資料、於宮城教育大学、2017年12月12日実施)

(2) 授業の実際

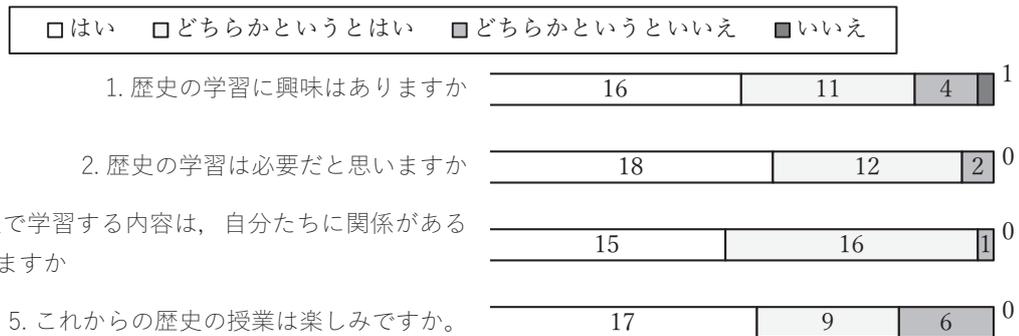
第3時ではインターネットを活用し奥州街道や宿場町について調べ学習を行ったが、児童は、吉岡宿や富谷宿(新町宿)の他にも「長町宿」「七北田宿」「古川宿」など自分たちが知っている地名が数多く登場することに関心を示していた。また、短時間ではあったがインターネットを活用して調べ学習をする中で、自分たちが修学旅行で訪れ親しみを感じている福島県にも「大内宿」があったことに注目したり、現在の吉岡宿や富谷宿(新町宿)、大内宿等の写真を見て当時の宿場町の面影が現在も残っていることに驚きを示したりしていた。さらに、授業後の学習感想を見ると、「北海道にも宿場町があるのかなと思った」「五街道の東海道五十七次や中山道六十九次の『五十七』『六十九』の数字は何の意味があるのかなと思った」といったように、新たな疑問を見だし更なる興味・関心を高めていた。

本時では、まず体育館においてパネル資料「楽山公行列図巻」の読み取りを行った。教科書や資料集に載っている大名行列の資料は一場面のみを表しているが、この図巻は行列の先頭から末尾までの人物が一人一人描かれているので見応えがあり、児童は体育館いっばいに並べられたパネルから読み取れることを真剣にメモしたり、気付いたことを友達と話し合ったりしていた。

教室に戻って気付いたことを共有する場面では、「寝ないでずっと歩いていたのだろうか」「寝ずに10日間は無理だ。途中でどこかに泊まったはずだ」「このために宿場町ができていったのではないか」「どこを歩いていったのか。これが奥州街道なのでは」と、前時の学習と関連付けた疑問や予想、考えが次々に出された。また、「なぜ江戸から仙台まで引っ越しをするのにこんなに人を連れていくのか」という一人の児童の疑問に対して別の児童が「荷物を運ぶのに人手が必要だったからではないか」と意見を述べ、さらに、「荷物を運んでいる人たちはみんな武士なのだろうか」「もしかして農民なのでは」という気付きも出てきた。続く第5時では、その「荷物を運んでいる人たちはみんな武士なのか」という疑問を基に学習課題を設定し、本時の内容と関連させ考えさせていった。荷物を運搬する役目を担っていた伝馬役について補足説明し、宿場町の人々が参勤交代を支えていたことに触れた。

児童の学習感想には、「いつも通っていた国道4号線が奥州街道だったと思うと、すごく歴史と関係があると興味を持ちました」「江戸時代から続く道を私は毎日のように使っている」「普段使っている4号線に歴史があることが分かった」「まさか自分たちが毎日何も感じずに使っていた道路が、江戸時代の人を作った奥州街道とは思わなかった」「今まで国道4号線のことを考えたことはなかったけれど、調べてみると江戸時代からの古い歴史があるんだと思った」「宮城から4号線をずっと通ると、東京(江戸)まで行くと聞いたことがある。4号線の学習はおもしろかった」といった記述が見られた。

意識調査アンケートの結果 (実践後)



また、意識調査の結果を見ると、設問「4. 歴史で学習する内容は、自分たちに関係があると思いますか」に対して肯定的に回答した児童は実践前の27名から31名にまで増加した。また、「設問2. 歴史の学習は必要だと思いますか」に対して肯定的・否定的な回答数に変化は見られなかったが、設問「3. それはなぜですか」に対しては、実践前は「将来に役に立つから」といった漠然としたことしか記述していなかった児童が「昔のことは現代につながっていておもしろいから」と記述するようになるなど、児童の歴史的事象の捉え方に変容が見られた。

(3) 活用した地域教材に関する授業者の所感

本校では昔からの小野地区に住んでいる児童は非常に少なく、ほとんどの児童は比較的近年に造成されたもみじヶ丘・杜の丘団地に住んでいる。自分たちの住んでいる団地自体がそれほど長い歴史を持つ土地ではないため、授業で扱う教材や授業構成を教師が意図的に工夫しないと、児童は自分たちが歴史の流れの中に生きていることを実感しにくいように感じた。また、同じ大和町内であっても吉岡宿のある吉岡地区は、本校児童にとって「吉岡小学校の人たちの地域」であり「私たちの地域」ではないと感じている節があった。しかし今回、吉岡宿一点に目を向けるのではなく、江戸から仙台・富谷・吉岡、それ以北の宿場町を地図でたどり、奥州街道に沿った広い視野で参勤交代について考えさせることで、日本全体の中の大和町、つまり自分たちの地域のこととして歴史的事象を捉えさせることができたのではないかと思う。

また、富谷市には現在も本陣跡や脇本陣跡がほぼ当時の姿のまま残されており、富谷宿（新町宿）があった通りは江戸時代の面影を残す「しんまち通り」として地元の小学生にも親しまれている。教員として大和町に赴任する前は富谷市に勤務していたが、その頃に今回のように地域教材の活用を目に向け、参勤交代と奥州街道、そして富谷宿（新町宿）について取り上げることができていたら、当時担任していた6年生ももっと歴史を自分事として捉えることができていたのではないかと思う。

今回活用したパネル資料「楽山公行列図巻」は仙台市博物館から借用したのだが、その借用手続きはごく簡単で、借りられる期間も2週間と授業の日程を組

んだり実践したりするには十分である。今回は、体育館においてパネル資料から情報を読み取る本時の前半部分は本校の第6学年3学級で一斉に行ったが、2週間もあれば各学級それぞれが都合のよい時間に授業を設定することも可能である。仙台市博物館にはこの他にも数多くの貸出教材が用意されており、例えば「仙台領奥州街道絵図」の泉・富谷・大和付近の部分などは、今回は残念ながら取り扱うことはできなかったが、時間的に余裕があれば是非読み取り資料として活用したい教材である。

3. 地域教材を考える

(1) 地域教材の使い方

さて、第2章では堀田氏による授業実践の様子について指導案を示しつつ紹介してきたが、本節では、児童たちの意識の変容について改めて整理し、そこから明らかになった問題点を指摘し、地域教材を使う時の使い方について考えてみたい。

まず、表4をご覧ください。これは、堀田氏が実施した「歴史の学習についてのアンケート①」・「歴史の学習についてのアンケート②」の調査結果を一覧にしたものである。これをみると次のようなことが読み取れる。

第一に、地域教材を用いた今回の授業実践を経て、「歴史」を「自分ごと」として捉える児童数が増えたことがわかる。すなわち、表4の「4. 歴史で学習する内容は、自分たちに関係があると思いますか。」という問いに対して、「そう思う」ないし「どちらかというと思う」と回答した児童の合計が27人（全体の84.4%）から31人（96.9%）に増えており、「あまり思わない」と「思わない」と答えた児童の合計が5人（15.6%）から1人（3.1%）に減少したのである。調査対象者は32人なので、そのほとんどが歴史の授業で学ぶ事柄を自分たちに関係のあるものと認識するに至ったことがわかる。「自分ごと」として「歴史」を学ぶ姿勢を身につけさせる上で地域教材を使用することの有効性が前稿での検証に引き続き証明された形となった。

ただし、授業する側の思い通りにはいかなかった点もある。堀田氏は、地域教材を使ったこの授業を通して、「主体的な学びが生まれる地域教材活用の場」に

表4 授業実践前後における児童の意識変化

調査項目	選択肢	① (授業実践前)	① 割合	② (授業実践後)	② 割合	人数 増減
1. 歴史の学習に興味はありますか。	ある	23	71.9%	16	50.0%	-7
	どちらかというところ	3	9.4%	11	34.4%	8
	あまりない	4	12.5%	4	12.5%	0
	ない	2	6.3%	1	3.1%	-1
2. 歴史の学習は必要だと思いますか。	そう思う	18	56.3%	18	56.3%	0
	どちらかというところ	12	37.5%	12	37.5%	0
	あまり思わない	2	6.3%	2	6.3%	0
	思わない	0	0.0%	0	0.0%	0
4. 歴史で学習する内容は、自分たちに関係があると思いますか。	そう思う	13	40.6%	15	46.9%	2
	どちらかというところ	14	43.8%	16	50.0%	2
	あまり思わない	4	12.5%	1	3.1%	-3
	思わない	1	3.1%	0	0.0%	-1
5. これからの歴史の授業は楽しみですか。	楽しみ	18	56.3%	17	53.1%	-1
	どちらかというところ	8	25.0%	9	28.1%	1
	あまり楽しみではない	5	15.6%	6	18.8%	1
	楽しみではない	1	3.1%	0	0.0%	-1

*堀田氏が実施した「歴史の学習についてのアンケート①」および「歴史の学習についてのアンケート②」の調査結果より作成。

することを目指して臨んだわけであるが、一部の児童にとっては歴史学習に対する興味・関心を実践前よりも失ってしまったことがわかる。表4の「1. 歴史の学習に興味はありますか。」の問いに対して「ある」と答えた児童に着目してみると、その数は、実践前の23人から16人に減少しており、割合でいえば、全体の71.9%から50%にまで減少してしまったことになる。歴史学習に対して初めから強い興味を示していた児童にとっては、今回の授業内容が興味を削ぐ結果をもたらしたということである。

もっとも、歴史の学習について興味が「ある」・「どちらかというところ」と答えた児童の合計数を比較してみると、26人(全体の81.3%)から27人(84.4%)に増えており、「あまりない」・「ない」と答えた児童数が6人(18.8%)から5人(15.6%)に減少しているので、クラス全体で考えた場合には、興味・関心の度合いが底上げされていることもわかる。

「5. これからの歴史の授業は楽しみですか。」という質問項目についても同様の傾向がみられ、「楽しみ」

と答えた児童は18人から17人に減少しており、初めから今後の歴史学習に対する期待度が高かった児童の一部に期待度の低下がみられる。ただし、この質問項目も、「楽しみ」・「どちらかというところ」と答えた児童の合計数には変化がなく、逆に、「楽しみではない」と最も否定的な選択肢を選んだ児童数が実践後には0人になっており、今後の歴史学習に対する期待度もクラス全体で考えた場合には底上げされている。

いずれにしても、もともと「歴史」に強い興味・関心を示し、これからの歴史学習に期待していた児童たちの一部から興味・関心を失わせてしまったことは確かであり、その理由を考える必要がある。では、何がいけなかったのか、いくつか気になる点について述べてみたい。

まず、今回の実践を行うにあたって組んだ単元指導計画における授業の順番に問題があるのではないかとと思われる。計画では、第2時「②大名の取りしまり」の次に第3時として「奥州街道と宿場町」を行い、その次にパネル資料「楽山公行列図巻」を用いた本時(第

4時)を実践しているが、第3時と第4時の順番を逆にした方が思考の流れから考えれば適切であろう。

第2時では、主に教科書を使って、武家諸法度の発布や参勤交代の制度化といった3代将軍徳川家光期の幕政について扱い、いわゆる幕藩体制が家光期に確立したことを学ばせ、大名統制の一環としての参勤交代制度について説明することになる。その際、児童たちが普段から使用している東京書籍の教科書『新編新しい社会6上』には加賀藩の参勤交代図が掲載されており(80頁)、同じ頁には各藩が参勤交代に要した日数について記した日本列島図が載っている。なお、その地図中には「仙台藩 約10日」と仙台藩の名もみつけることができ、例年、教科書をみた児童からは、仙台藩の行列はどうかという疑問が発せられるそうである。

また、東京書籍のこの教科書には「ことば 参勤交代」という小見出しの説明書きがみられ、「参勤交代が制度化されて、各藩の財政は苦しくなり、幕府に逆らうことは、難しくなりました。一方で、参勤交代は、街道や宿場町が整備されたり、江戸の文化が各地に伝わったりすることにも役立ちました。」と書かれており(81頁)、「街道」や「宿場町」に関しては教科書の本文ではなく欄外に説明される形となっている。こうした補足説明がみられ、「大井川のわたし」を描いた絵図も載ってはいるが(80頁)、「街道」や「宿場町」の姿がわかるような絵図は掲載されておらず、視覚的な情報を得ることはできない。

つまり、『新編新しい社会6上』は、幕府が行った参勤交代の制度化が各藩にとって大きな財政的負担となっていたことを本文において述べ、また、長大な加賀藩の参勤交代の行列を描いた絵図や参勤交代の日数が記載された日本列島図を載せることによって、本文の叙述をより理解しやすくする工夫がなされているのであるが、一方で、こうした大名行列が行き交う「街道」や、行列を迎え、参勤交代という制度を下支えしていた「宿場町」の民衆たちについてはイメージしづらい内容となっているのである。¹⁶

ここで、単元指導計画に話を戻すと、こうした教科書の内容を考慮すれば、第2時「②大名の取りしまり」において、3代将軍家光期に参勤交代が制度化されたこと、長大な行列を組む藩にとっては財政的負担が大きかったことを教えた後に、地域に目を移し、パネル

資料「楽山公行列図巻」を活用することによって仙台藩でも巨大な行列が組まれたことを実感させるという順番で繋げた方がよいであろう(第4時を第3時に移動)。次に、「参勤交代は、街道や宿場町が整備されたり、江戸の文化が各地に伝わったりすることにも役立ちました」という教科書の記述に立ち戻り、参勤交代という制度を成り立たせていた「街道」や「宿場町」(とそこに住み伝馬役を負担した民衆たち)に着目させ、そこから、地域に目を移し、「奥州街道と宿場町」について説明する(第3時を第4時に移動)。

そして、第5時では教科書を使って「③人々のくらしと身分」について取り扱うこととするが、教科書(『新編新しい社会6上』)には現青森県弘前市中心部の地図に旧弘前藩の城下町にあった町名を重ねる形で描いた地図が掲載されており、現在の都市にも江戸時代の城下町のなごりがみられる様子が示されているので(同書82頁)、この部分と関連づけて仙台の様子を「仙台北下の概略図」を用いて説明する。と同時に、城下の中心部を貫く奥州街道沿いの町人地にも伝馬役を負担した町が配置されていたことを「新伝馬町」という町名を読み取らせることによって気づかせ、既習事項と関連づけながら解説する。

以上のような順番で単元指導計画を組んだ方が第2～5時までの学習内容に繋がりが生まれ、児童も理解しやすかったのではないかと思う。今回は、パネル資料を借用に行く日程と授業日との関係もあって、先のような形で実践していただいたが、前述したような順番で授業を行えば、アンケート結果も違ったものになったのではないだろうか。

もう一点、検討すべき事がある。それは用いた地域教材の中身についてである。今回は、「楽山公行列図巻」と「仙台北下の概略図」を用いたわけであるが、それらを用いて何を教えるのか、何を掴ませたいのか、そういった地域教材を使う意図が上手く伝わらなかったことも児童たちの興味・関心を失わせる要因になっているのではないかと思われる。パネル資料「楽山公行列図巻」は横に繋げると長さが約40m以上にもなるものであり、¹⁷ 行列を形作る総勢1577人¹⁸にもおよぶ人物の一人一人の様子が読み取れるものであるが、「街道」や「宿場町」をイメージさせるには相応しい教材とはいえない。

一般に参勤交代の大名行列は全てが武士身分に

よって構成されているわけではなく、膨大な荷物を運搬する人足が混じっているのが普通である。忠田敏男氏によれば、加賀藩前田家13代齊泰が1827年(文政10)に参勤した時の行列は総勢1969人であり、そのうち加賀藩の家臣は185人しかおらず、その他は、藩の陪臣たち830人、藩が雇い入れた人足686人、宿継人足268人などによって構成されているという。¹⁹ つまり、参勤交代の行列には運送に従事する宿場の人々など武士身分以外の者たちが大勢混じっているものであり、小野小学校の児童の「荷物を運んでいる人たちはみんな武士なのだろうか」という疑問は、発展的な学習をする上では非常に良い疑問であったといえる。そういった意味では、「楽山公行列図巻」を丹念に読み解く作業は意味のある行為だともいえるが、誰が人足であるのか図中に注記されているわけでもないので、²⁰ そうした武士身分以外の人々を児童たちが「楽山公行列図巻」から読み取るのは非常に難しいのである。

一方で「仙台北下の概略図」には確かに「新伝馬町」という町名をみつけることができ、伝馬役を负担する人々が住む町であったことを想起させることができるが、城下町の町人地であるため、城下町から離れた「街道」や「宿場町」の姿を学ばせるのには適していない。参勤交代の制度化と「街道」・「宿場町」の整備を関連づけて教え、かつ、参勤交代は単に幕府が制度化したり街道を整備したりすれば行えるものではなく、そこには伝馬役を负担した宿場町の人々の存在があったことに気づかせ、参勤交代の制度化や街道の整備といったいわゆる中央からの視点だけではなく、伝馬役を负担した宿場町など日本各地の現地の人々の視点から歴史的事象を捉え、考えることのできる力を育むためには、パネル資料「楽山公行列図巻」を使用するのではなく、「街道」や「宿場町」を描いた絵図を使うべきであろう。そして、その延長線上に、身分ごとに居住地が区分されていた構造を持つ城下町の内部にも伝馬役負担者の集住する町があったことを説明した方が良いように思われる。

堀田氏によれば、今回の第3時「奥州街道と宿場町」で行った学習は児童たちの興味・関心をかなり引き出したといい、日常的に通っている「道の歴史」は大きなインパクトを与えたようである。そうだとするならば、やはり、江戸へと繋がる「街道」と「宿場町」を描いた絵図を使い、宿場町に住む人々にスポットを当て

る方が、より歴史を身近に感じ、「歴史」をみる見方も豊かになったのではないだろうか。

別稿でも述べたように、歴史離れが指摘されている現在にあっても、小学6年生の「歴史」に対する興味・関心は決して低くないのであり、²¹ それを如何にしてより一層伸ばし、主体的な態度で学習に向かわせるのが重要である。今回の実践を通して、地域教材は、やはり、「自分ごと」として「歴史」を捉えさせる一つのきっかけを与えるものであることが証明されたが、地域教材を使用することによって逆に児童の興味・関心を喪失させてしまっただけでは本末転倒であり、何をどのように活用すべきか念入りに検討しつつ教材化を図っていくべきなのであろう。堀田氏には、タイトなスケジュールのなかで、筆者が無理をいって授業実践をお引き受けいただいた経緯があり、また、それぞれの地域教材についてじっくりと協議する時間的余裕もなかった。この場を借りてお詫び申し上げるとともに、感謝の意を表したい。

この実践結果とアンケートの調査結果を踏まえ、どのような教材をどのように用いればより良い授業を展開できるのか、今後も検討を重ねていきたい。

(2) 地域に残る街道絵図

最後に、もし今回の授業実践ではかの資料を地域教材として使うとするならば、どのような資料があるのか、一点だけ紹介し、本章の結びとしたい。

紹介したいのは、仙台市博物館が所蔵する「仙台領奥州街道絵図」という絵図である。本絵図は、1724～1737年(享保9～元文2)の間に制作されたものだと推定され、作者は不明である。旧仙台藩領内を南北に貫く奥州街道を東の上空から俯瞰して描いており(絵図の向かって右側が北で、左側が南)、街道とその周辺の様子を具体的に知ることができる非常に貴重な資料である。²² 後掲の絵図1～3は同絵図の新町宿(現富谷市富谷)と七北田宿(現仙台市泉区)付近の部分であるが、その他の地域についても、現在の岩手県南部～宮城県域を通過していた奥州街道沿いの様子を探ることができる。

なお、この絵図を利用する前に奥州街道がどこを通過していたのかを把握する必要がある。そこで、仙台藩領を通る奥州街道の道筋を大まかに記した地図²³を載せたのでご参照いただきたい。



地図 仙台藩領を通る奥州街道

では、後掲の絵図1～3について、いくつかポイントとなる点について確認してみよう。まず、新町宿付近を描いた絵図1-①であるが、街道の出入り口には「木戸」が設けられており、この「木戸」を入ると周辺の村々や街道沿いの風景とは異なる町場化した空間が広がっており、宿場町の住人たちが住む屋敷が道の両側に建ち並んでいることがわかる。

宿場町のなかを進んでいくとその途中には「高札

場」があり、四隅に柱のある屋根付きの建物のなかに高札が建てられている様子わかる（絵図1-②）。こうした幕藩の禁令・法令を庶民に周知する高札を掲げる「高札場」は幕藩領主の権威を誇示する場としての役割を担っており、²⁴ 新町宿にもそうした場所が存在したのである。

なお、この絵図に描かれたような「への字」に曲がった道筋は現在でも確認することができる。



絵図1-① 『仙台領奥州街道絵図』(新町宿付近)

次に、絵図2について。これは七北田宿を描いた部分であり、新町宿と同じように、宿場町の出入口には「木戸」が存在し在り地とは異なる町場であることが視覚的にもわかるようになっている。そして、新町宿と同じく、七北田宿のなかにも「高札場」が設けられていたことがわかる。七北田川にかかる「橋」やその側にある「明神」も描かれており、どちらも現在でもみることができるものがある。

また、橋をわたると土まんじゅうに木が植えられた「一里塚」をみることができるが、徳川の世になって



絵図1-② 『仙台領奥州街道絵図』(新町宿の「高札場」)



絵図2 『仙台領奥州街道絵図』(七北田宿～七北田橋付近)



絵図3 『仙台領奥州街道絵図』(七北田橋～八乙女付近)

全国に普及した「一里塚」が、七北田宿を出て橋を渡り終えた辺りにも存在したことがわかる。明治以降、鉄道の普及とともにその姿を消すことになる「一里塚」は、江戸時代には全国の街道の両脇に設置されており、1里(約4km)ごとに置かれたことから里程の目安や乗り賃支払いの場合の目安に役立ち、日差しの強い日には木陰の休所ともなったという。²⁵

最後の絵図3は絵図2の続きの部分である。「一里塚」を越えると「八乙女」という地名がみられ、現在の仙台市営地下鉄南北線の八乙女駅(仙台市泉区)付近の江戸時代の様子がわかる。さらに街道を南へ進むと「斬罪場」と「石仏」があるが、この「斬罪場」は奥州街道沿いに設けられた罪人の処刑場で、本絵図が描かれた後の時代にあたる1746年(延享3)に仙台藩5代藩主伊達吉村の妻長松院の意向によって念仏堂(河北堂・河南堂)が設置されているが、²⁶ この絵図中には街道の方を向いている「石仏」が描かれている。

以上、絵図に描かれたポイントとなるようなものについて、若干の説明を加えた。ほかにも現在まで残る寺社や地名・道が描かれており、興味は尽きない。この「仙台領奥州街道絵図」についても、仙台市博物館にはパネル資料が用意されているとのことなので、貸出資料を利用したいとお考えの学校関係者が積極的に利用されることを期待したい。

おわりに

今年度前期、2年生向けのある授業でレポート課題を出したところ、「歴史というのは自分たちとはかけ

離れたテレビドラマのように感じていた」と書いてきた学生がいる。「歴史」を「自分たちとはかけ離れたテレビドラマのように感じていた」というのだから、まさに「他人ごと」としてしか「歴史」をみておらず、「自分ごと」として「歴史」を学ぶ経験を全くして来なかったことが如実にわかる文章である。また、別の学生は、これまで受けてきた「社会科の授業」を評して、「ただ過去にあったことを黒板に並べるだけ」だといい「歴史を身近に感じられることはほとんどなかった」という感想を漏らしている。「歴史」は日常生活のなかで「使う」ことがないばかりか「遠い過去の出来事」なのであり、が故に、身近には感じられないのだという。

果たして、こうした感覚は珍しいものなのであろうか。前稿でも述べ、本稿の冒頭でも触れたように、自らが生きている時代よりも何世代も前に起こった歴史的事象を「他人ごと」ではなく「自分ごと」として捉えるのは、そもそも簡単なことではないのであり、どうすれば児童・生徒をして「歴史」を「自分ごと」として捉えさせ、主体的に学習する意欲を湧き上がらせることができるのか、それを考えていく必要があろう。

一方で、児童・生徒たちは教科書以外の知識や情報を欲しており、逆に、教科書のみを使った、教科書の内容のみに終始する授業、すなわち、「ただ教科書の内容をそのまま板書したり、話したりするだけ」で、「説明も教科書に載っているような説明」をするだけの授業を嫌い、そうした授業は、児童・生徒の興味・関心を削ぐ結果をもたらしてしまい、「歴史の勉強」=暗記という印象まで与えてしまう可能性がある。

以上のような状況に鑑みると、古くからその教育

的効果が注目されている地域教材の活用を試みてはどうか。「歴史」を「自分ごと」として捉えることも、身近に感じることもできないような児童・生徒たちにとって、自分たちの地域に関わりのある地域教材を用いた授業というのは、遠い過去の歴史的事象を自らに引きつけて捉え、「自分ごと」として歴史学習に向き合う一つのきっかけを与えてくれるものなのである。そのことは、前稿と本稿で紹介した2回の授業実践の結果からも明らかであろう。その使い方に注意が必要な点もあるが、²⁷「他人ごと」ではなく「自分ごと」として「歴史」を捉えさせるようにするという意味では非常に有効な手段である。

昨今の教員をめぐる状況をみたと、業務の多忙化が教材研究を行う時間的余裕さえ奪ってしまい、地域の歴史に眼を向けるような教員の数自体が減少しているのではないだろうか。それは、自治体史編纂の様子からも想像でき、かつての市町村史は地域の歴史に精通した小中高の教員が執筆者の一員に名前を連ねている例がみられるが、近年では、こうした地域の歴史を熟知する教員の数がめっきり少なくなっているような印象を受ける。

第1章第2節で紹介した歴史科学協議会主催の「座談会」の場で、教員養成系大学・学部の大学院が教職大学院に一本化されることが話題に上っている最中、小嶋茂稔氏は、「これまでは各県の国立大学の教育学部での社会科の教員養成というのは、事実上、地域史の研究者養成機能も担っていたわけですが、こういう事態のなかでかなりの県で、そうした人材育成の機能が、相当怪しくなってきたのでないか」と述べ、「中・高の教員養成の機能のなかに、地域に戻ってそういう地域史に関わる教員なり研究者を育てていくということが、今後一つ、史学科なり歴史系の大学院に期待されることになるのではないかな、と思います」との見解を示している。²⁸

かつての教員養成系大学・学部が担っていた地域の歴史を研究できるような人材の育成が今後はできなくなっていくことを危惧した発言であるが、本稿でみたように、現時点でも、若手教員たちは「地域教材を開発・活用する能力」を必ずしも必要とは考えていない様子が垣間見られ、すでに、地域に眼を向け、地域の「もの・ひと・こと」を教材化しそれを活用するというところに積極的意義を見いだしていない教員も多いのではない

かと思われる。

しかるに、歴史教育についていえば、目の前の児童・生徒たちに、自分たちが歴史の延長線上にいるということを実感を持って理解させ、歴史を身近に感じさせ、「自分ごと」として「歴史」を捉えさせる上では、授業のなかに地域教材を取り入れることが非常に有効な手段となりうるのである。そして、こうした地域教材を使いこなすためにも、まずは、教員の側が地域に眼を向け、地域の歴史を知ることが重要なのではないだろうか。そういった意味で、われわれ研究者の側も地域の歴史をわかりやすく社会に発信していくことが、かつての研究者以上に求められているのかもしれない。

注

- 1 以上、佐々木潤「最高のスタートを！ どの子も社会科好きになる仕掛け術」（『社会科教育』720、2019年）28頁参照。なお、佐々木氏によれば、「全国で行われた『義務教育に関する意識調査』（文部科学省：二〇〇五年六月）では、体育科が80.8%で一位、社会科は47.0%（複数回答）で最下位。二〇〇六年ベネッセが実施した『第四回学習基本調査報告書・国内調査小学生版』でも、好きな教科の第一位は体育科で84.9%、社会科は48.0%でここでも堂々の最下位」だとい、氏は、これらの調査結果から判断し「社会科は嫌われている」としている。
- 2 『小学校学習指導要領解説 社会編』（文部科学省、2017年）3-4頁。
- 3 山田智「だれが歴史教育を『暗記』にするのか」（『歴史評論』774、2014年）55頁。
- 4 中瀬雅之「【6年】歴史っておもしろい 自分事として捉える歴史学習」（前掲『社会科教育』720）66-67頁。
- 5 遠山茂樹「2 社会科教育の領域と内容—歴史」（同『遠山茂樹著作集 第七巻 歴史教育論』（岩波書店、1992年）所収、初出は岩波講座『現代教育学』13、1961年）24頁。
- 6 堀田幸義・堀田理永「小学校の歴史教育における地域教材の活用と主権者意識の醸成」（『宮城教育大学紀要』53、2019年）136頁。以下、「前稿」と表記。
- 7 中瀬前掲「【6年】歴史っておもしろい 自分事として捉える歴史学習」67-68頁。
- 8 前稿。
- 9 詳しくは、田中良英・堀田幸義・津田智史「小学校社会科教育における歴史的思考力の涵養に向けて」（『宮城教育大学紀要』54、2020年）第2章を参照のこと。
- 10 「元生徒」を対象とするアンケート調査については、すでに小田中直樹氏による研究がある。小田中氏は、全国7大学の経済学部で開講された歴史関連科目の受講者を対象に、高校における世界史および日本史教育全般をめぐるアンケート調査を実施しており、そのなかから世界史の授業を取り上げ、「元生徒」である大学生たちが記したコメント118件をもとに、回答者が「授業がすぐれていると判断する根拠」について分

析している。その調査によれば、「授業内容」については、「エピソード」・「わかりやすさ」・「ストーリー」が重視され、「授業方法」についてはプリントや視聴覚教材を含む教科書以外の補助教材を教員が独自に採用・作成したような場合に高い評価が与えられているというが（以上、小田中直樹『世界史の教室から』〈山川出版社、2007年〉11-22頁より）、筆者が行ったアンケートの調査結果にも同様の傾向がみられる。

- 11 黒川みどり「教員養成の立場から歴史教育を問う」（前掲『歴史評論』774）47-48頁。
- 12 本学事務局のHP (<http://www.miyakyo-u.ac.jp/localpublication.html>) を閲覧（閲覧日：2019年9月19日）。
- 13 詳しくは、松岡尚敏・村上由則・出口竜作・堀田幸義「宮城教育大学における教員養成教育の軌跡と展望(2)」(『宮城教育大学紀要』51、2017年)、松岡尚敏・村上由則・出口竜作・堀田幸義「宮城教育大学における教員養成教育の軌跡と展望(3)」(『宮城教育大学紀要』52、2018年)、村上由則・松岡尚敏・出口竜作・堀田幸義・石澤公明・小針善誠「宮城教育大学における教員養成教育の軌跡と展望(4)」(『宮城教育大学紀要』53、2019年)を参照のこと。
- 14 高埜利彦・糟谷憲一・川手圭一・津野田興一「座談会 大学における歴史研究／教育の現在と未来」(『歴史評論』833、2019年)14頁。
- 15 山下真一「〈筑波大学附属小学校発〉『主体的・対話的で深い学び』をつくる教材研究ABC」(前掲『社会科教育』720)96頁。
- 16 こうした教科書の書かれ方については、前稿121～123頁を参照のこと。
- 17 仙台市博物館学芸普及室「博物館資料の紹介」より。なお、同資料は仙台市博物館学芸普及室指導主事の片寄角洋氏よりいただいた。
- 18 渡邊洋一「特論三 仙台藩の参勤交代」(『仙台市史 通史編 3 近世1』仙台市、2001年)438頁。
- 19 以上、市川寛明「通日雇」(東京都江戸東京博物館編『参勤交代』東京都江戸東京博物館・財団法人東京都歴史文化財団、1997年)70頁、忠田敏男『参勤交代道中記』(平凡社、2003年)76-77頁より。
- 20 仙台市博物館の倉橋真紀氏にご教示いただいた。
- 21 田中良英・堀田幸義・津田智史前掲「小学校社会科教育における歴史的思考力の涵養に向けて」第2章より。
- 22 佐々木和博「『仙台領奥州街道絵図』の基礎的検討」(『仙台市博物館調査研究報告』10、1990年)参照。
- 23 渡辺信夫『みちのく街道史』(河出書房新社、1990年)の図7(34頁)などより作成。
- 24 服藤弘司「こうさつば 高礼場」(『国史大辞典5』吉川弘文館、1994年)353頁。
- 25 林英夫「いちりづか 一里塚」(『国史大辞典1』吉川弘文館、1995年)662頁。
- 26 堀田幸義「第二章第二節 七北田」(『仙台市史 特別編9 地域誌』仙台市、2014年)91頁。
- 27 なお、地域教材の効果とその限界や注意点については、前稿124-126頁を参照のこと。
- 28 高埜利彦・糟谷憲一・川手圭一・津野田興一前掲「座談会 大学における歴史研究／教育の現在と未来」23-24頁。なお、高埜利彦氏も、地域史の活動が盛んな長野県を例に、

かつては小中高の教員が『信濃』という雑誌の発行母体である学会を担い続けていたこと、そうした状況に変化がみられることについて述べている(22頁)。

【謝辞】「仙台領奥州街道絵図」の利用に関して仙台市博物館から御高配を賜りました。特に、同館の片寄角洋氏と水野沙織氏には資料や情報の提供にご尽力いただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

(令和元年9月27日受理)

